

---

# 白き鬼神と蒼穹の引き手(仮)

シノン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白き鬼神と蒼穹の引き手（仮）

### 【Nコード】

N6916Y

### 【作者名】

シノン

### 【あらすじ】

遺伝子の異常変化により凶暴な存在と化した生き物たち。【災禍】と呼ばれるその恐怖を相手に、人類は生き残ることが出来るのか。現代より少し先の未来の話。主人公が異形の化け物相手に戦うお話です。

素人なので優しい目で見てくれるとうれしいです。

主人公が戦ったり、突っ込んだり、あきれたり、泣いたり、笑ったり。

スピード重視のお気楽小説、開幕！

## プロローグ 世界観（前書き）

初投稿です。素人なので生暖かい目で見守ってくれればいいです。

## プロローグ 世界観

時は現代。

人類は未知の恐怖におびえていた。

【災禍】《カラミティ》という存在が明らかにされたのは今からおよそ二十年前。

地球上の生物の遺伝子が異常変化することによって生まれた異形の化け物たち。

銃弾を弾き、非常に強い耐火性を持つ彼らは、人類全体の共通の敵となっていた。この脅威に対し、各国は即座に対策を施し始める。

その結果、【災禍】にも弱点が存在することが分かった。

彼らの外殻は刃に弱かった。簡単に切り裂けるというほどではないが、足止め程度にしかならない銃弾や火炎放射器に比べれば幾分かマシなのは確かであった。この点、日本は他国より恵まれていたといえる。日本には昔から刀という斬ることに特化した武器があったからだ。

【災禍】の外殻は点の衝撃に非常に強いことが確認されているため、槍や弓などの貫く武器ではなく、大剣や刀、もしくはハンマーなどの武器で戦うことが、常識として確立されていた。

また、【災禍】が世間に認識されるのとはほぼ同時期に、特殊な力に目覚める人間が確認されている。これは【災禍】という天敵に対する、人類という種族の防衛機構のようなものではないかと考えられている。その超能力とでもいうべきものを身につけた者たちは、体に『霊頸』と呼ばれる新たな機関を持っているため、進化した人類ではないかと考える学者も多い。

彼らもまた、【災禍】への対抗策として、戦うことになる。各国は非常に強い戦力である彼らを、教育機関をつくり管理することを決定。生まれた子供はすべて病院で『靈頸』の有無を調査され、十四歳になると同時にその教育機関に移される。

これは、彼らの戦いの物語だ。

七年前。

とある【災禍】が日本の山間の町を襲った。人口三百四十二人の小さな町はわずか二時間でほとんどの人間が死に絶えた。

第特級【災禍】、アラバスタ。大鷲が異常進化した【災禍】である。巨体に似合わぬ異常な機動力と、【災禍】の特徴ともいえる堅固な外殻。それは世界中の政府を悩ませるもっとも厄介な【災禍】だ。空を飛ぶ敵に斬りかかることなどできず、銃弾はあっけなくはじかれる。戦闘機が近距離で放ったミサイルすら易々とかわされ、体当たりを食らってバランスを崩し、海に墜落した。アメリカが三十基の戦闘機で出撃したが、遭遇の一時後に全滅させられている。小さな町に対抗策などあるはずもなかった。

日本政府が連絡を受けて現場に着いたときは、そこには廃墟と食い散らかされた元人間が転がっているだけだった。生き残りは四人。彼らの証言で町を襲ったのはアラバスタであることが確認された。四人は政府によって保護され、三人が元の生活に戻っていた。そこに至るまでに絶大な苦労があったことを、念のため書き記しておく。

残った一人は『靈頸』持ちだった。七歳の少年は国の施設で暮らし、【災禍】の知識を貪欲に吸収していった。彼が『力』の使い方を理

解したのは八歳の時。超感覚 と名付けたその『力』と、十歳の時より始めた戦闘訓練。少年が選んだ武器は、槍。【災禍】に対して不利であるとして、施設の職員は口をそろえて反対したが、少年は自分が選んだ武器を決して変えようとはしなかった。

少年は年に似合わぬ物静かな少年に育っていった。朝早く起きて黙々と槍を振るう少年。昼間は【災禍】に対する知識を勉強し、夕方になると槍の訓練や走り込みを行う。

施設に入ってから六年。

入学の時間が近づいてきていた。

「……いよいよ君ともお別れだね、悠里君。」

施設の入り口に立って感慨深そうに眼鏡を持ち上げる男性。優しい風貌の中に、隠しきれない別れの寂しさがあった。その目が写すのは、細く引き締まった体をした十四歳の少年。右手には槍が握られている。日本人らしい黒髪と、深さを湛えた黒い瞳。

「……七年間もありがとうございました、須藤先生。」

言って、少年は深々とお辞儀をした。それを見た須藤と呼ばれた男性は苦笑する。

会ったばかりのことを思い出したのだ。

顔を上げた少年も隠し切れない笑みを浮かべていた。心を開いたものにはしか見せない、優しく悲しい微笑。

「僕から言えることは一つだけさ、悠里君。」

須藤はまた眼鏡の位置を直しながら言う。おそらくはそんなことを考えたこともない、少年へのアドバイスだ。

怪訝な顔をした少年に、須藤は優しい笑みを浮かべ言う。

「死なずに、帰っておいで。君の家はここなんだ。」

後ろに並んでいた職員たちが一斉に頷く。

それを見た少年は驚くように周囲を見る。職員総出で見送りに来ていたのだ。

腕組みをしてしきりにうなづく男性職員。

ハンカチで目元をぬぐいながら笑う女性職員。

恰幅のいい体をいっぱいに揺らして手を振る食堂のコック。

「……………みなさん、七年間本当にありがとうございました!!」

少年は目元から溢れ出しそうになる涙をこらえながら、施設に別れを告げた。

【災禍】と戦ったための、更なる力をつけるために。

## ブローグ 世界観（後書き）

誤字脱字、感想やアドバイスなど、ありましたらお願いします。



## 第一話 始まりと邂逅

ただ学園と称される教育機関。

その戦闘技館

体育館より頑丈な施設

に八十二名の新

入生が並んでいる。

一般の学校と違うことは、三割ほどの生徒が何らかの形で武装していることだろう。周囲の生徒が緊張でその身を固くする中、明らかに空気が違う二人がいた。

右手に槍を携え、目を閉じている少年と、弓を支えに眠りこける白髪の少女だ。見る者が見れば、少女の周囲に青い靄のようなものがたなびいているのが見えるだろう。

「今年はすごいのが入ってきたね。」

車椅子に腰かけた老齢の女性が、しみじみと言う。その両目は紫色に輝いており、見定めるように新入生を見回している。

スキル 鑑定眼。目に写した対象の情報を、大まかにだが知ることのできるスキルである。

「確かにあの二人はほかの生徒とは一線を画していますね。」

もつとも、少年と少女がほかの生徒よりも強いであろうことなど、ある程度の修羅場をくぐってきたものが見れば一目瞭然だが。

（スキル 超感覚 …… 記憶力、思考力、聴力、視力の強化ですか。少女は、スキル 霊姫 …… おや？ 私の 鑑定眼 でも見れませんか。相当ランクの高いスキルのようですね。）

だがおそらく弓で戦うことによる何らかのメリットがあるスキルなのだろう。そうでなければ、【災禍】への有効打にはなりにくい弓を使う理由が見つからない。

槍もそうである。だが槍は弓と違って前例がある。かつて、槍を使って【災禍】と渡り合っていた女性がいたのだ。日本最強と言っても過言ではない、『神槍』と呼ばれた女性が。

（問題は彼が『神槍』の域までたどり着けるかどうかですか……  
いいえ、たどり着かせるための学園ですね。）

「よく来た、新人生の諸君。これより入学式を始める。」

淡々とした声を聴いて、老婆は思考の海から現実へと意識を引き戻す。槍を持った少年は目を開き、少女は眠そうな視線を壇上の男に向けた。

「これからのことを簡単に説明する。自分がどんなスキルを持っているかわからないものは、玉響教授に『視て』もらうように。」  
玉響教授の名前が出たタイミングで、老婆は車椅子でゆっくりと前へ出てお辞儀をする。柔和な笑みを浮かべたまま、ゆっくりと後ろへと下がった。

「ここに来る前に何らかの形で戦闘訓練を行っているものは、戦闘科に行つて自分の名前を登録してもらえ。本格的な授業は明日からだ。各々、武器を揃えるなり、班を組むなり、明日に備えてくれ。ああ、あと班は基本的に四人編成だから、五人以上で組むことは認められていない。以上だ。」

話が終わったと判断した人間がチラホラと動き始める。

教師たちが注目している二人も、ゆっくりと戦闘科の建物に歩いて行った。

「指揮官と前衛、武器は槍で登録お願いします。」  
「お名前とクラスをどうぞ。」

「1Aの葛城悠里です。」

戦闘科の建物は非常に無骨だった。一見すると普通の事務室に見えるが、傘たてのようなものに、剥き身の剣がいくつも刺さっている。そこに三十八人の新入生が集まっていた。

そのうちの一人である葛城悠里は、滞りなく登録を終えた……はずだった。

「葛城悠里さんですね？ 少々お待ちください。……こちらが班申請の紙になります。」

「へ？ いや俺はまだ班は……」

悠里がここに出向いたのは単純に自分を戦闘科に登録するためである。班を組むためではない。そもそもこの学園に入学したての自分に、どうやって班を組めというのだろうか。

「今回の入学者は八十二名です、四で割ると二余ってしまいます。ならば、成績上位者同士で組んでもらい、できるだけ戦力差を均等にしようという上の考えです。」

よく見ると、すでに名前が書いてあった。葛城悠里の下に、鳳院雪那という名前が既に書かれている。

悠里は、入学時の試験で満点を取ったことを思い出した。

「すでに鳳院雪那さんのサインは頂いているので、あとは葛城さんがサインしていただければ、登録は完了となります。ちなみに拒否権はないのであしからず。」

につこりとほほ笑む栗毛の受付嬢に、思わずため息をつきかける。悠里はかろうじてそれを堪えると、班申請の紙にサインするのだった。

翌日。

朝早く起きた悠里は愛用の槍を持って外に出た。昨日のうちに確認しておいた訓練場へと向かう。

訓練場では、上級生と思しき人たちが剣や刀を振るっていた。その邪魔にならないように端の方へよると、悠里は槍を振るい始める。ただ無心に槍を振るう。もちろん周囲の状況を探ることも忘れない。珍しい槍という武器を振るう悠里に最初は注目が集まっていたが、やがてみな自分の訓練に戻っていった。

突く、薙ぎ払う、振り回す。仮想敵の攻撃をかわし、受け止め、槍ではじく。

重い鉄製の槍を振り回しているのに、悠里の態勢は崩れない。

実はこれには秘密がある。

前述したとおり、スキルと呼ばれる力に目覚めた者たちには『靈頸』と呼ばれる器官を持つ。いまだに原理は不明だが、『靈頸』はエネルギーを生み出す。このエネルギーは『靈力』とよばれ、彼らはこの力を使い無意識に身体能力を上げているのだ。また、『靈力』は武器に纏わせたり、『靈術』として使うことが出来る。もっとも靈術は発動するのにそれなりの時間がかかるため、戦闘に使う者はまずくない。

一通り槍を振り終わった悠里は、まだ訓練している上級生を尻目に訓練場を後にした。

ゆっくりと廊下を歩いて、1Aの教室に向かう。今が七時過ぎで、最初のHRが始まるのが七時半のため、余裕で間に合う計算となる。その途中だった。

「……………何してんだ？」

学校の廊下で行き倒れてる人間と出会ったのは。

## 第二話 決闘ともう一人（前書き）

このペースで行けるといい、なあ。

## 第二話 決闘ともう一人

「……………寝ている。」

「そういうことじゃねえっ!!」

悠里は思わず声を大にして突っ込んでしまった。床に横たわった少女は、ゆっくりとその身を起こした。背中の中ほどまで垂れていた白髪が光を反射して揺れる。眠たげに眼をこする少女はポケっとした黒い瞳で悠里を見つめている。

「質問を変えよう。どうしてここで寝てたんだ。」

「……………眠かったから。」

「自分の部屋で寝ろよ。」

ポクポクポクチーン。

なるほどといった様子で手を叩く少女に、悠里は関わり合いになるのをやめようと判断した。しかしそうも言っていられなくなった。

「……………ここで会ったのも何かの縁。私は鳳院雪那。よろしく。」

少女はそう言っ弓を握りしめた右手を差し出す。

対する悠里は、どこかで聞き覚えのあるその名前を、どこで聞いたのか思い出そうとしていた。

ほーいんせつな。ほういんせつな。鳳院雪那。

「お前が俺のパートナーか……………。よろしく、鳳院雪那。俺の名前は葛城悠里だ。」

全てを諦めたかのようにため息をついた悠里は、差し出された右手を見やる。その右手はいまだにがっちり弓を握りしめており。

「……………パートナー。握手。」

「出来るわけないのを見てわかれ!!」

普段は冷静な悠里は、この鳳院雪那という少女のペースに飲み込まれていた。

朝のHRが始まった。

一クラス四十一人で構成されたクラスで、やはりというか悠里と雪那は浮いていた。

その二人の席は隣同士である。おそらく学園側が取り計らってくれたのだろう。で、悠里の隣で雪那が何をしているのかというと。

寝ている。

より正確に言うと爆睡している。

教師も特に注意する気はないのか、てきぱきと連絡事項を伝えていく。もつとも教師が説明している連絡事項は、あらかじめ設けている説明会をきちんと覚えていれば全く問題はないのだが。

悠里は腕組みをして不機嫌そうな空気を周囲にふりまいている。なぜならこの爆睡女が説明会の時に起きていたとは考えづらく、結局自分が全部説明することになるのを理解しているからだ。

十分後、まさにその通りになった。

一時間目の授業は、簡単な【災禍】の見分け方の授業だった。目の前の【災禍】の強さが分からないことは、ほとんどが死につながるので生徒は必死に授業を聴いていた。

二人を除いて。

雪那は相変わらず爆睡しており、悠里も興味がないと言いたげに窓の外を見ていた。そのとき窓のそとでは上級生が戦闘訓練を行っており、それを見て参考になるような上級生を探していたのである。

（あの大剣使い動きがいいな……。いや、あれは防御用のスキルを使っているのか。）

そんな二人に教師が業を煮やした。

「葛城、第特級【災禍】を四体あげてみなさい。」

「アラバスタ、バズット、ゲヘナ、ホーホーホー。」

悠里は教師の方を一瞥もせず即答した。その目はまだ校庭で大剣を振るう上級生から離れない。

「鳳院、それぞれの特徴を言ってみなさい。」

「……………大鷲の異常進化型。空中からの奇襲に注意。ヒゲマの異常進化型。見かけに似合わず速い。元が分かってない【災禍】。発見報告もほばない。海蛇の異常進化型。音で敵を惑わせる。」  
雪那はドサツと力尽きたように机に突っ伏すと、そのまま寝息を立て始めた。

悠里は何事もなかったかのように外を見続けている。そんなことを繰り返している間に一時間目は終わったのだった。

二時限目は霊術の使い方の授業だった。

戦闘で使いづらいといっても、時間をかければ威力の底上げや機動



力の強化などが出来るため、覚えておいて損はない。靈頸によって生み出されたエネルギー、靈力を、『式』と呼ばれる回路に流すことで任意の事象を起こす。この方法が確立されたのはごく最近である。それまでは靈力を特定の部位に集中させることで、筋力の強化などを行っていた。

しかしこの方法は効率が悪く、せいぜい二、三分しか持たなかったのだ。

靈力を『式』に織り込むことで、より効率よく身体強化などを行うことが出来る。この発見は式を発明した人間とともに、大喜びで世界に受け入れられた。しかしその人間の詳細な情報は伏せられている。

一時間目を全くとっていいほど聞いていなかった二人も、この授業は最後まで真面目に聞いていた。

三時限目と四時限目は戦闘訓練。

この戦闘訓練こそが、学園の真髄と言えるだろう。座学や靈術の授業などはあくまでおまけに過ぎない。

周囲を高い石壁に囲まれた学園の校庭では、八十二名の人間が集まっていた。ようやく暖かくなってきた日差しを浴びながら、校庭を走り続ける生徒たち。

十周を越えたあたりで、数人の生徒たちがリタイアした。

二十周を越えたあたりで、半分の生徒たちがリタイアした。

三十周を越えて、走っている人間は十数人になった。その十数人は入学式に武器を持参した者たちである。彼らは自らの武器を構えたまま走り続けている。悠里と雪那は涼しい顔をして走っていた。

四十周を越えたところで、教師がストップをかけた。十分間の休憩である。わずかに息が上がっているだけの生徒たちは、リタイアした生徒たちの羨望とやっかみの視線を受けながら、腰を下ろした。悠里も休むことの重要さを知っているので、その場に腰を下ろす。すると、普段の眠そうな瞳を鋭くとがらせた雪那が近づいてきた。

「決闘だ、葛城悠里！！」

やる気溢れる声で叫んだ雪那を、校庭にいた人間全員が呆然と見つめる。

.....どちら様で？

## 第二話 決闘ともう一人（後書き）

誤字脱字、アドバイスや感想などありましたらお願いします。

## 第三話 決闘の結末（前書き）

投下ッ！！

### 第三話 決闘の結末

「……………とりあえず理由を聞かせてくれ。」

周囲があまりの衝撃に凍り付くなか、なんとか平静を取り戻した悠里が問いかける。

暖かな春の校庭に、少女の言葉を待つ八十一人の生徒……………シュー  
ルな光景だ。

「簡単なことだ。貴様が本当に私のパートナー足り得るのか……………  
証明してもらおう。」

「あなたは本当に鳳院雪那さんですか？」

思わず敬語になってしまった悠里の問いかけは届かなかったようだ。  
ざわつく周囲を見かねた教師がようやく話に割り込んでくる。その  
まま悠里と男性教師でひそひそ話開始。

「悪いね、葛城君……………彼女はすごい二重人格の戦闘狂なんだよ。」

「だから諦めて戦えっていうんですか。」

「う、まあ……………安全措置はとるから大丈夫、だと思っ。」

「……………なんで今一瞬詰まったんですか。」

「いや、彼女ね、スキルの暴走で家屋が半壊したって噂が……………」

「……………やればいいんですね？ 負けてもいいですよね。」

「それはもちろん！」

いい笑顔だった。対する悠里は重くため息をつく。

自分が組んだパートナーは、非常に面倒くさそうなやつだと思いな

がら。

「準備はいいな。」

「目前二メートルぐらいまで近寄ってからお願いします。」

「戯言をほざくな。」

悠里は腰だめに槍を構え　　といつても安全のため穂先は丸い

、雪那も矢を弓につがえた。こちらの矢の先も潰されている。

二人の距離はおよそ十七メートルである。なぜこんな中途半端な数字になったかという、二十メートルでやろうとした雪那に悠里が  
ごねてごねてごねまくったからだ。

出来るだけ有利な戦場で、が悠里のモットーなので無理もないかもしれない。

両者の間に緊張感が満ちる。悠里は槍を構え前を見据え、敵のわずかな拳動も見逃さまいとしている。

「では、行くぞ?」

ピイイイイイイ!!

青空に開始のホイッスルが響き渡った瞬間、悠里が素早く身をかがめて地面を蹴る。

ッヒュンッ!!

雪那が放った矢は、一瞬前まで悠里の胴があつた場所を突き抜ける。そのスピードは、明らかに異常だった。女性……それもまだ年若

い少女が出せる矢のスピードではない。

（スキル……？ いや、あれは違うな……霊術か。）

雪那はあらかじめ、矢に式を刻んでいた。その効果は空気抵抗の減少、スピードも上がるというものである。

雪那は一本目が外れたことにも動揺せず、素早く二本目の矢を構えた。

（スキル 超感覚 起動！！）

手加減をして勝てる相手ではない。お互いの実力を測るというならいい機会だ、こちらもできる範囲で全力で行かせてもらう。悠里は自分のスキルを起動すると目を見開いた。

超感覚 により上昇した動体視力は、矢じりを掴む少女の右手の動きを止まっているように見せる。その指が離された瞬間、右手に握りしめた槍を振り上げる。まるで世界を置き去りにして自分だけが動いているような感覚。

（もつと先がある……！！）

振りあげた槍は、狙い過たず矢を払いのけた。

カンツと軽い音が響き、あさつての方向にすっ飛んで行く矢。それを一瞥すると、悠里は距離を詰めるべく地面を蹴った。

残り十二メートル。

動揺しつつも冷静に、雪那は距離を取る。まさか槍で防がれるとは思っていなかったのか、その顔は非常に悔しそうだ。

そのくちびるが、動く。普通ならば聞き取れないほどの声量で呟いたのだろうが、超感覚 によって聴力が上昇している悠里にはかろうじて聞き取れた。

「集え蒼き霊たちよ、汝らが友が命ずる」

ぞくつ、と悠里の背中に寒気が走る。

本能と体全体が訴えかける、『全力でかわせ』と。

強化された目に映るのは、雪那の手元で青白く輝く一本の矢。その矢にどれだけのエネルギーが秘められているのか  
そんなことを考える悠里の耳に、雪那の呟き声が届いた。      そんな

「我が敵を殺せ。」

雪那の指が開かれる。それを見た瞬間、一も二もなく、悠里は全力で横に跳んでいた。

雪那の指から放たれた光芒は、悠里の横を通り過ぎると校庭に突き刺さる。

「これは……食らったら死ぬんじゃない……」

校庭に突き刺さった矢は一本だが、その周囲に四つの穴が開いていた。撃った矢は一本。穴は五つ。

霊力によって編まれた不可視の矢。それが今の技の正体だ。

「よくかわした、が。次は十本だ。」

「何本まであるんだ!？」

「安心しろ、百はない。」

「出来るかつ!!」

軽口をたたきながら悠里は地面を蹴る。

確かに不可視の矢は脅威だが、雪那は悠里の前に手の内を晒し過ぎた。

（超感覚 派生スキル解放、 並列思考 ！）



派生スキル。

これは最近その詳細が明らかにされたものだ。

身体強化などのスキルを使って、体の特定部分を強化すると、たまに新たなスキルが目覚めることがある。

たとえば筋力上昇のスキルを使い続けると、**堅牢** という新たな派生スキルが発生することがあることが確認されている。

悠里が使う **超感覚** はその点、派生スキルの宝庫である。

思考力を上昇させれば **並列思考** に。

視力を上昇させれば **鷹の目** に。

だが、派生スキルは持ち主に負担を強いる。発動中はその部位に痛みが走るし、同時に多種のスキルを使うと、元の自分の体との差異に、感覚が狂っていくとされている。

悠里は自分が持つ派生スキルを全て解放したことは一度もないから、それをしたらどうなるかはわからないが、碌なことにはならないであろうことはわかっていた。

（つぐ………！）

派生スキル **並列思考** の発動に伴い、頭痛が悠里を襲う。同時に二つのパターンを考えられるようになった頭で、雪那の姿勢の意味を判断する。どこを狙っているのか、どのタイミングで撃つのか、

**並列思考** と強化された記憶力と視力で見極める。

本人も気づいていない、無意識の呼吸のタイミングすら記憶し、攻撃をかわす。

連続で放たれる矢の全てを、雪那が撃つ前にかわしきる。

「嘘……………だろう……………」

「嘘だと思っなら好きにしろ……………」

距離を詰め切って、雪那の細い首筋に槍の穂先を当てた直後、悠里は意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6916y/>

---

白き鬼神と蒼穹の引き手(仮)

2011年11月24日21時47分発行